

Title	大学図書館評価
Author(s)	Susan, Gibbons; 西川, 真樹子
Citation	大学図書館研究 (2008), 84: 5-8
Issue Date	2008-12-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/81821
Right	This is not the published version. Please cite only the published version. この論文は出版社版ではありません。引用の際には出版社版をご確認ご利用ください。
Type	Journal Article
Textversion	author

(訳)

大学図書館評価：Assessment in Academic Research Libraries

訳者：西川 真樹子

抄録：現在，GoogleやAmazonのような新しい，破壊的技術によって，大学図書館は危機に直面している。この危機を救えるものこそ，質的データによる評価方法である。今まで，多くの図書館では，ARL年間統計のような量的データでしか評価されてこなかった。ロチェスター大学リバー・キャンパス図書館では，質的データを応用したワーク・プラクティス研究によって，大学図書館の新しい評価方法を探ってきた。その取り組みを紹介する。

キーワード：評価，大学図書館，機関リポジトリ，勤務評価，ワーク・プラクティス研究，質的データ

伝統的に，アメリカにおける大学図書館の評価は量的なもので，ほとんど実施されず，対外面を意識したものであった。しかし，Google Book SearchやGoogle Scholar, Amazon.comのように破壊力をもった技術によって，大学図書館が直面する本当の意味での競争がもたらされている。結果として，千年を超える歴史のなかで初めて，大学図書館は，卓越した大学にはそれに見合った図書館が必要であるという仮定を証明し，守らなければならなくなった。

図書館の付加価値や費用対効果をはっきりと示すことは容易ではなく，それを伝えることはもっと難しい。1961年より，収集・貸出・費用に関する年間統計がAssociation Research Libraries（北米研究図書館協会，北アメリカ約120の大規模リサーチ・ライブラリの代表機関，以下ARL）によって作成されている。評価の測定方法に関して，ARL統計は図書館管理職が自館の事例について表や割合，ランキングリストを作るための簡単なデータのまとまりとしている。残念なことに，これらの年間統計の数字は，ローカルキャンパスにおける大学図書館の本当の成果やインパクトを理解する手がかりを与えてはくれない。ARL統計は数えられるものを重視しているが，大学図書館が成功していることの多くは数えられないのだ。

量的測定方法は確かに有用であるが，意味のある評価方法とするには質的データと組み合わせられるべきである。ロチェスター大学リバー・キャンパス図書館には，最も有効で効果的であると証明された，質的で，学内に焦点を当てた，よく行われる評価方法がある。

図書館のなかの人類学者

2003年，リバー・キャンパス図書館（RCL）では人類学者のNancy Fried Foster博士を雇用した。これは臨時の雇用ではない。Foster博士は大学の機関リポジトリ事業を推進する役割を担ってRCLにやってきた。教員は機関リポジトリを活用するように大学から言われていたが，かつては使われていたものの，教員の参加レベルはかなり低かった。博士にその役割が与えられたのは，教員のニーズをより理解できるように，ワーク・プラクティス研究を指揮することが目的であった。ワーク・プラクティス研究というのは伝統的に人類学で行われてきた参与観察に基づいた，人々を綿密に観察し，書き記していく調査方法である。ワーク・プラクティス研究の例としてWenger（1998）とGodwin（1994）の研究がある。

どのようにすれば機関リポジトリを教員の実際の研究活動にフィットさせることができるかをよりよく理解するために，1年間の推進期間中，Foster博士はワーク・プラクティス研究を通して，図書館スタッフのチームを指導した。そのプロジェクトは私たちの期待をはるかに超えるものであった。様々な人類学的で民俗学的な技術を駆使し，プロジェクト・チームは，いくつもの研究分野の教員がどのように研究を行っているかについて，信じられないくらい深い理解に達することができた。この情報から，RCLでは，機関リポジトリを改善する方法と，教員のニーズと現在の研究とをうまく連携させる方法を見つけ出すことができた。（Foster&Gibbons 2005）

この教員プロジェクトの成功によって，次のプロジェクト－2年間の学部学生の調査－に移り，学生

がどのようにして大学で研究を行っているかを取り上げるようになった。学部学生調査プロジェクトには、RCLの30人以上のスタッフが関わったが、ロチェスター大学生の生活の全体像を分析するために、写真抽出法や日常行為のマッピング、回想インタビューなどの方法を混ぜて使われた。この巨大な全体像から、RCLでは、図書館のサービスや施設、電子資源が学生のアカデミックで社会的な生活にいかにかマッチしているのか、マッチする可能性があるのかを理解しようとした。

(Foster&Gibbons 2007)

それまでの調査でははっきりわからなかった、図書館にとって重要な利用集団の存在を確かめるために、RCLでは、2006年に大学院生の研究を始めた。このプロジェクトは、2008年9月に完了するように予定され、RCLが大学院生のニーズに見合う、よりよいツールとサービスを作り出せるように、大学院生がいかにか研究を行い、学位論文を書いているのかに特に注目している。

質的データの応用

RCLが3年のワーク・プラクティス研究で集めた質的データは、量的データ（例：ARL統計）では計ることのできない点で、驚異的な力を発揮した。量的データでは十分に示せない欠陥を補うために、RCLのサービスや設備、電子資源に重大な変化がもたらされた。ここに数例をあげる。

1996年から2006年に、RCLに毎年寄せられるレファレンス質問件数が、97,850件から47,950件に落ちた。ほぼ50,000件の落ち込みである。この数字は有用な情報ではあるが、「なぜ?」という質問に答えてくれない。前もってレファレンスの質問に答える手段として、Webがレファレンス・ライブラリアンに取って代わったのではないかと、私たちの多くは推測した。だが、この落ち込みの全ての原因はWebにあると考えられるべきであろうか？ 質的データよれば、少なくともRCLでは、答えは“NO”である。そしてより重要なことには、ライブラリアンがこの減少傾向に歯止めをかけられる可能性があるということである。

RCLプロジェクトが集めた、学生へのインタビューに関する何百ページにもわたる調査結果から、学生がアシスタントのいるレファレンス・デスクに近寄りがなくなっている傾向が読み取れた。例えば、図書館ではしばしば、備え付けのパソコンを

使うために学生が列をなしている。当然のことながら、パソコンを使っていてレファレンス・アシスタントが必要になった学生は、わざわざレファレンス・デスクまで歩いていったために、今使っているパソコンの場所を他の学生にとられるという危険を冒したくない。レファレンス・アシスタントの必要性はあるが、物理的にレファレンス・デスクまで歩いて行かなければならないというのは、もはや適した解決法ではない。

なぜレファレンスの質問数が少なくなったかという問題の他の部分的答えは、学生の日常行為のなかにあった。RCLプロジェクト・チームは学生のボランティア・グループに彼らの日常を拡大キャンパス・マップに落とすように依頼した。学生たちはキャンパス中の動線を書き込み、どこにいつ、なぜ行ったのかを記録した（Clark 2007）。このことで、ロチェスター大学生の生活は驚くほどスケジュールが決められ、忙しいことがわかった。朝早くから夜遅くまで、学生は授業やチューター・セッション、グループ・ミーティング、クラブ活動、バイト等の間で動き、予定のない時間はほとんどなかった。結果的に、夜遅く、たいていは午後11時から午前1時の間になってようやく、多くの学生は宿題や研究報告、大学活動に費やせる予定のない時間をもつことができた。しかしながら、RCLのレファレンス・デスクは午後9時には閉まる。これは、学生が本当にレファレンス・アシスタントを必要としそうな時間よりも2時間も前である。レファレンス・デスクのサービス時間の短さが、学生がレファレンスを利用しようとするときの障害になっているかどうかを確かめるため、RCLはセメスター中の調査期間、レファレンス・デスクのサービス時間延長を行った。

学部学生についてのまた別の実験では、図書館で戸惑いを覚えたところや勉強しやすい場所のような特定の場所の写真を撮影するために、RCLのプロジェクト・チームにボランティアの学生が補充された（Briden 2007）。ある写真には学生が身の回りで持ち歩いているものが撮影されていた。どの写真にも含まれていたのは、学生の携帯電話だった。キャンパスで学生が携帯電話を持ち歩いていることは、さして驚くべきことではないが、これらの写真によってRCLプロジェクト・スタッフは、学生たちとコミュニケーションを取る潜在的方法を活用してこなかったという事実を突き付けられた。というのは、図書館にレファレンス・デスクの電話番号が掲示された場所はない。学生たちがRCLプロジェク

ト・チームに指摘し、私たちが気づかされたことだが、RCLのホームページの一番下にも電話番号がない。もしレファレンス・デスクの電話番号が書架やパソコン端末コーナーの周辺、学生寮に掲示されていたら、レファレンス電話の数は増えるであろうか？ RCLは答えを見つけたと信じている。

調査はしばしば評価の方法によって左右されるが、しかしながら、その核となる部分では、たいいていの調査は量的、すなわち回答を数えるものである。「なぜ」の質問への回答を集める効果的な調査はとても難しい。しかし、RCLプロジェクト・チームは大学院生を研究し、インタビューという方法が「なぜ」の答えを与えてくれることを発見した。例えば、学生たちは必要なツールが何かと尋ねられたとき、参考文献や引用文献を管理するのを助けるツールという答えがしばしばあった。この答えのおかげで、RefWorksやEndNoteのライセンスを購入することになった。

残念ながら、RefWorksやEndNoteが利用可能になったことによって、大学院生の文献管理ツールに対するニーズが満足させられることはなかった。いくら製品の広報をしても、ニーズのレベルを変化させることはできなかった。RCLプロジェクト・チームが大学院生にインタビューして初めて、本当の問題が明るみに出た。大学院生は一旦、学位論文の執筆に取りかかり始めると、たとえ助けになるツールとわかっていても、RefWorksのような新しいツールを使いたがらなかった。大学院生は在院中に、何か新しいことを学んだり、新しいツールを体験するために時間をとられたりするのを嫌がった。その代わりに、彼らは大学院の授業が始まった最初の頃に、RefWorksやEndNoteについて学ぶ機会を欲しがった。大学院生になった最初のセメスターは、大学院生が文献管理ツールについて自由に学ぶことができる、ベストで恐らく唯一の時間枠であるということが証明された。この理解によってRCLは、大学院生の学問分野に合ったオリエンテーション・プログラムの重要性を認識し、オリエンテーション・プログラムのカリキュラムを検討するきっかけとなった。

結論

評価は大学図書館にとって、贅沢品ではなく必要不可欠なものである。最も資金が潤沢な高等教育機関以外は、恐怖の資金配分をめぐる、キャンパス内の全ての部門で競争している。大学図書館はキャンパスの付加価値についてきちんと議論し、配分さ

れた資金を効果的に使っているということを証明する必要がある。ARLのような量的評価基準は、自館と他館を競争させ、図書館の質についてほとんど明らかにしない。大学図書館はまず初めに、そして主に、自館の利用者に説明責任がある。意味のある変化を起こし、その変化が正しい方向であると強く思えるように詳しく説明できるのは、質的評価方法なのである。

*本稿の翻訳に関しましては、筑木一郎氏（京都大学附属図書館電子情報掛）にご教示、ご助言を賜りました。この場をお借りして、御礼申し上げます。

Briden, J. "Photo surveys: Eliciting more than you knew to ask for". Studying students: the undergraduate research project at the University of Rochester, Foster, N. ; Gibbons, S. eds. Chicago, ACRL, 2007. p.40-47 (online), http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/publications/downloadables/Foster-Gibbons_cmpd.pdf, (accessed 2008-12-28)

Clark, K. "Mapping diaries, or Where do they go all day?" Studying students: the undergraduate research project at the University of Rochester, Foster, N. ; Gibbons, S. eds. Chicago, ACRL, 2007. p.48-54 (online), http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/publications/downloadables/Foster-Gibbons_cmpd.pdf, (accessed 2008-12-28)

Foster, N. ; Gibbons, S. "Understanding faculty to improve content recruitment for institutional repositories". D-Lib Magazine. 2005, vol.11, no.1. (online) <http://www.dlib.org/dlib/january05/foster/01foster.html> (accessed 2008-12-28)

(上記参考文献の日本語訳)

“より多くのコンテンツを機関リポジトリに集めるために教員を理解する”. 国立情報学研究所メタデータ・データベース共同構築事業 学術機関リポジトリ構築ソフトウェア実装実験プロジェクト参考文献・関連資料 (online) <http://www.nii.ac.jp/metadata/irp/foster/> (accessed 2008-12-28)

Foster, N. ; Gibbons, S. "Library design and ethnography". Studying students: the undergraduate research project at the University of Rochester, Foster, N. ; Gibbons, S. eds. Chicago,

ACRL, 2007. p.20-29 (online), http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/publications/downloadables/Foster-Gibbons_cmpd.pdf, (accessed 2008-12-28)

Goodwin, C. "Professional Vision". *American Anthropologist*, New Series. 1994, vol. 96, no.3, p.

606-633.

Wenger, E. *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*. New York, Cambridge University Press, 1998.

< 2008.10.9 受理 にしかわ まきこ 京都大学人間・環境学研究科学術情報掛 >

NISHIKAWA Makiko

Assessment in Academic Research Libraries

Abstract: Academic research libraries are facing a significant challenge because of competition posed by new disruptive technologies such as Google and Amazon, and need to find ways to justify their existence. In the past many academic research libraries relied on quantitative data like ARL's annual statistics for assessment. At the University of Rochester, River Campus Libraries it is qualitative, internally-focused and frequent assessment methods that have proven most useful and effective. This article introduces some of these methods.

Keywords: assessment / academic libraries / institutional repositories / work-practice study / qualitative data